

教育と研究をとおして社会の発展に 貢献—教員と職員の役割

立命館大学は、人間形成・人材育成の目的を実現するための教員集団を組織していきます。知的なコミュニケーションをとおして学ぶことの面白さを伝え、研究をとおして社会貢献していくことの大切さを伝えることのできる教員として、その資質向上に努めます。また、専門分野にかかわらず、教養教育を担うことのできる幅広い識見、人間の成長と人格形成にかかわる職業であることの使命感と倫理観、「平和と民主主義」という大学の教学理念の深い理解をあわせもった教員集団として成熟をめざしています。さらに、外国籍、年齢、性別等を配慮した教員集団としての多様性構築に努力します。

大学は、最新の研究成果を教育に還元すること、および研究成果を広く社会に還元することによって、社会の発展に貢献する責務を負っています。R2020計画では、国際的な視点でこれらの研究活動を展開し、特色あふれる「グローバル研究大学」を目指します。そのために次の4つの基本方針を掲げています。①立命館大学らしい特色あふれる研究の推進、②研究の国際化を重視したグローバルな展開、③大学院博士

課程後期課程の強化と若手研究者の育成、④常に研究者がいきいきと研究に取り組める研究環境の醸成です。学びのコミュニティをいきいきとさせるためにも、大学院政策と研究政策を統合した研究者のリサーチコミュニティを活発にしていきます。

さらに、学習者としての学びと成長を支援するためには、職員の役割も多様性をもちます。大学行政の担い手としての役割は当然のことですが、学びのコミュニティを創出し、機能させていくコーディネーションも大切な役割となってきます。

地域と連携し、社会に貢献する 「キャンパスの創造と計画」

R2020計画では、「学習者中心の教育をすすめること」「多様な学びのコミュニティを創出すること」「正課と課外の枠を超えること」「コミュニティでの学び合いを重視すること」等に力点をおき、教育の質の向上をはかります。「学びのコミュニティ」の活性化はひきつづき重要な課題です。さらに今後は、ビジョンに掲げたように個人の視点も重視し、ひとりひとりが自らの「学びの羅針盤」を形成できるような教育に取り組んでいきます。

みなさんが学んでいる現在の立命館大学

は、衣笠一拠点化計画、理工学部拡充移転によるびわこ・くさつキャンパスの開設、文理総合を掲げた経済・経営学部の移転等のキャンパス創造の歴史の貴重な到達点です。しかしながら、大学の充実とともに、狭隘化が進展し、現代的な水準で確保されるべきアメニティ形成やエコキャンパス課題も含めると、大胆な改革が求められています。R2020計画はこの課題に挑戦します。そのための鍵は、「ゆとりの創出」です。学生・院生や教職員がゆとりをもってコミュニケーションできる空間を創り出す計画とします。R2020計画は「キャンパスの創造と計画」の取り組みとなります。具体的なキャンパスの整備については、集える場、コミュニケーションできる場、ワークショップする場、静かに学習する場としての多機能性をもつ共同空間(コモンズ)をつくりだすことを重視していきます。

さらに、それぞれのキャンパスそれぞれ自身が地域と連携するものでありたいと考えています。1小学校、4中学校・高校、多文化共生キャンパスである立命館アジア太平洋大学を擁した私立総合学園としての連携をさらにすすめ、関西の三つの府県にまたがり、世界へと開かれ、社会に貢献する立命館大学へと飛躍していきます。



若者が学問と世界に出会い、自分を超えていく「学びのコミュニティ」の創造めざして

知的な行動力と協働する人間力、それが立命館の学生。

— 学生を学びのプロにする、教育の質の向上に取り組みます。 —

未来の立命館をつくる論議に参加してください

2011年度は、立命館学園の今後10年間の基本的な計画となるR2020計画がスタートする年です。全学協議会(以下、全学協)は立命館大学を構成する各パートが重要事項について話し合う場です。大学とは何かを理解し、自らの学ぶ環境を点検し、学びを創りだしていく能動性を身につける機会となります。学生・院生のみなさん、大学は自分にとってどのような意義をもつか、社会のなかでいかなる役割を發揮できるのかと問い、自らの行動の指針となるような答えを出す機会としてください。

2007年度全学協以降の立命館大学

立命館大学の教育と研究は内外から注目されています。人類的課題に応え、国際的に卓越した教育研究拠点(立命館グローバル・イノベーション研究機構(R-GIRO)やグローバルCOE拠点)の形成に努力してきました。また、国際教育水準の高度化をめざす「国際化拠点整備事業(グローバル30)」にも選定されました(英語で授業をおこない卒業できるコースや専攻の開設)。これらは教育力と研究力の強化について努力を続けてきた成果といえるでしょう。

みなさんが所属する学部・研究科の個性ある教育は受験生をはじめとして社会の関心を集めています。2008年度以降、生命科学部、薬学部、スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科、映像研究科、文学

部・国際関係学部内の新プログラムを開設し、社会の期待に応える教育分野を創造してきました。こうして13学部・17研究科を擁する私立総合大学へと発展を遂げてきました。さらに、学部・研究科の教育を支援する教育開発推進機構の開設をはじめとして、全学プログラムを担う教学組織(国際教育、言語教育、教職教育、共通教育の各機構)を整備し、みなさんの多様な学びの要求に応えてきました。大規模で複数のキャンパスに分かれています。立命館大学が一体的に機能し、まとまりのある学びのコミュニティを成しているのは、学部・研究科の学びを核とした、全学的な共通教育の実践や学生の課外・自主活動、そして研究者の活躍の総合的な結果です。

また、新しい総長選挙規程を定め、学生や院生も参加した学園あげの総長選挙を実施することができました。さらに、立命館大学情報公開制度を創設しました。ひきつづき、学内における民主主義の徹底と社会的説明責任を果たす課題に取り組んでいます。

他方で、大学のあり方の基本にかかわる問題が発生したことも無視できません。必要な授業時間が十分でなかった「会計士サポートプログラム」問題、入学者を入学直後に転籍させた「特別転籍」問題、複数のハラスメント事件等です。大学入試のあり方や責任ある教育とは何かが社会的にも問われ、学外の協力も得た検証を行い、必要な是正措置と再発防止に取り組んできた4年間でもありました。

大学になお解決すべき問題や課題があれば自ら修正していくこと、足らざる点があ

れば補い、改めるべき点があれば改めるのが教育機関の本来の姿です。選挙や対話等による民主主義の実践、全学協とおとした学びの環境の創造は、未来をささえる成熟した市民としての能動性をシミュレーション体験しているのです。こうしてみなさんが立命館大学で経験するすべてのことは「学びの実践」として意味をもっています。

今、みなさんは学問の自由と大学の自治が保障されている空間に身を置き、進路・職業選択にとどまらず、人間形成にとって貴重な時間を過ごす真只中にいます。大学としてもその重責を自覚し、社会からも支持される10ヵ年計画として策定し、立命館大学への期待に応えていきたいと考えています。「創造と革新」へと歩みをすすめていくR2020計画とします。

計画の全体像を提示していきます

大学の魅力は、学生のいきいきとした成長と躍動、教員の情熱と意気込み、探求心あふれる研究者の輝き、教育研究を支える職員の働きがいの総体から成り立っています。この魅力を發揮させるためのR2020



計画とします。単に10年間だけではなく、18歳人口が再び減少に転じる2020年以降の立命館大学のあり方にも影響を与える未来創造の政策課題としてR2020計画を位置づけます。

2011年度全学協の政策提言は、このリーフレットをもとにして、①大学教育全体にかかわる改善の方向性を述べたもの(教育についての全学版学園通信、各学部の計画を示す学部版学園通信、大学院教育の改善の方向性を示す大学院版学園通信の三種類です)、②学生生活(奨学金政策を含みます)の包括的支援政策を示すもの(学生生活・キャリア形成・課外活動版学園通信)、③新しい学費・財政政策を提案するもの(財政政策版学園通信)から成ります。あわせて、④計画全体の中間点となる2015年度に開設予定の大阪・茨木キャンパス(仮称)の構想、衣笠・朱雀両キャンパスを一体とした京都キャンパスとしての充実政策、びわこ・くさつキャンパスの将来像を総合した「キャンパスの創造と計画」にかかわる基本提案も、別途示されます。

学園ビジョンの策定—「Creating a Future Beyond Borders 自分を超える、未来をつくる。」

学園はR2020計画策定のためのビジョンを策定しました。このビジョンは、構成員ひとりひとりが学園のあらゆる資源と機会をとおしてさらに異なる自分へと飛躍をとげていくことを強調したものです。立命館大学というコミュニティをとおして自分を超え、未来を創造する主体であって欲しいとの意図が込められています。ひとりひとりの学生と立命館という学びのコミュニティが織りなすダイナミックな関係をとおして、知的な躍動感あふれる大学にしていこうという今後の方向性を示唆しています。学習者が中心となる学びのコミュニティで、学生は主体的に学び、他者と協働し、生涯にわたり学び、自己変革や環境を変える働きかけができる学びの主人公になることを期待されています。学生を学びのプロにすることが大学の役割です。こうしたことを表現したのが学園ビジョン、「Creating a Future Beyond Borders



自分を超える、未来をつくる。」です。

さらに、東日本大震災・原子力発電所事故をうけた日本社会の復興と再建への貢献という視点から計画を再度練り直します。日本社会の復興に大学創造をとおして寄与していく機会とすべきだと考えます。科学技術や学問研究をとおして困難を克服し、持続可能な社会の創造に貢献する立命館大学をめざす計画とします。みなさんは今、社会の再建の担い手として育つことを期待されています。もちろん大学もその役割を果たす責務があります。この体験をとおして得られた識見を、学園ビジョンやR2020計画へ反映させる必要があると考えています。

立命館大学の学生像—知的な行動力と協働する人間力

立命館大学には「知的な行動力と協働する人間力」をもった学生が多数います。それは学部・研究科における人間形成・人材育成の目的にも表現されています。未来社会と国際社会の担い手になること、社会問題の解決力を身につけること、科学技術の自主的平和的発展に寄与することが目指されています。さらに、持続可能な社会の創造にむけた使命感・倫理観を有する専門人の育成、人間の幸福と自然の調和に貢献し、地球市民としての独創性を持ち、革新的に社会の課題を解決する人間像が共通に謳われています。加えて、課外・自主活動、ボランティア、インターンシップ、国際社会での活躍を含めたアクティブな学生像も立

命館大学生の姿です。

しかし、若者が置かれている現実や現代社会は複雑です。解決すべき問題も一筋縄ではいかないことばかりです。さらに、身につけるべきとされる知識水準や力量も高度になっています。複雑に連鎖した諸課題を解決することのできる人間を育成することは、今、まさに日本社会が遭遇している課題そのものです。その先導的役割を發揮できる計画にしていくことは未来に対する立命館大学の責務だと考えます。

大学での学びの核心は、自らの「学びのスタイル」を身につけていくことです。未来へとむかう能動的な学びが期待されています。この点では、いくつかの課題があります。たとえば、立命館大学の学生実態から、①失敗を恐れず一歩を踏み出す勇気とリーダーシップを養うことが課題となっています。さらに、②多様性のなかで他者とともにある感性や異文化への配慮・敬意が要請されています。加えて、③自分を超える行動力と社会性ある人間へと育つことが期待されています。立命館大学はこうした成長を可能にする選択肢を数多く開発していきます。

この意味では、小集団を軸とした学びを重視します。演習や実験、クラスやサークル・クラブ、ボランティアや国際活動等の多様な学びをとおして、「学びの自分史」をつくりあげ、「学びをとおした自己形成」の場となるような計画にしていきます。立命館大学という学びのコミュニティで若者は「知的な行動力と協働する人間力」をもった人へと育っていきます。